

十勝岳の火山活動解説資料（令和7年8月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

62-2火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では引き続き噴煙・噴気が多く、熱活動が活発な状態が続いています。今後の火山活動の推移には注意が必要です。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3～9）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間の噴煙の高さは火口縁上600m以下で経過しました。大正火口の噴気の高さは100m以下、振子沢噴気孔群の噴気の高さは稜線上100m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴気は2018年頃からやや高い状態が続いています。

12日及び22日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、過去の観測と比べ、各火口等の噴煙や噴気の状態及び地表面温度分布等に特段の変化は認められませんでした。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-④～⑥、図10）

火山性地震は少ない状態で経過しました。震源は主に62-2火口のごく浅い所、旧噴火口付近のごく浅い所～深さ1km付近及びグラウンド火口付近の深さ0km～深さ1km付近に分布しました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図11～12）

62-2火口の周辺及び山麓の傾斜計では、今期間は特段の傾斜変動は観測されていません。

GNSS連続観測では、2021年以降に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は一部の基線で概ね停滞しています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警戒等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和7年9月分）は令和7年10月8日に発表する予定です。

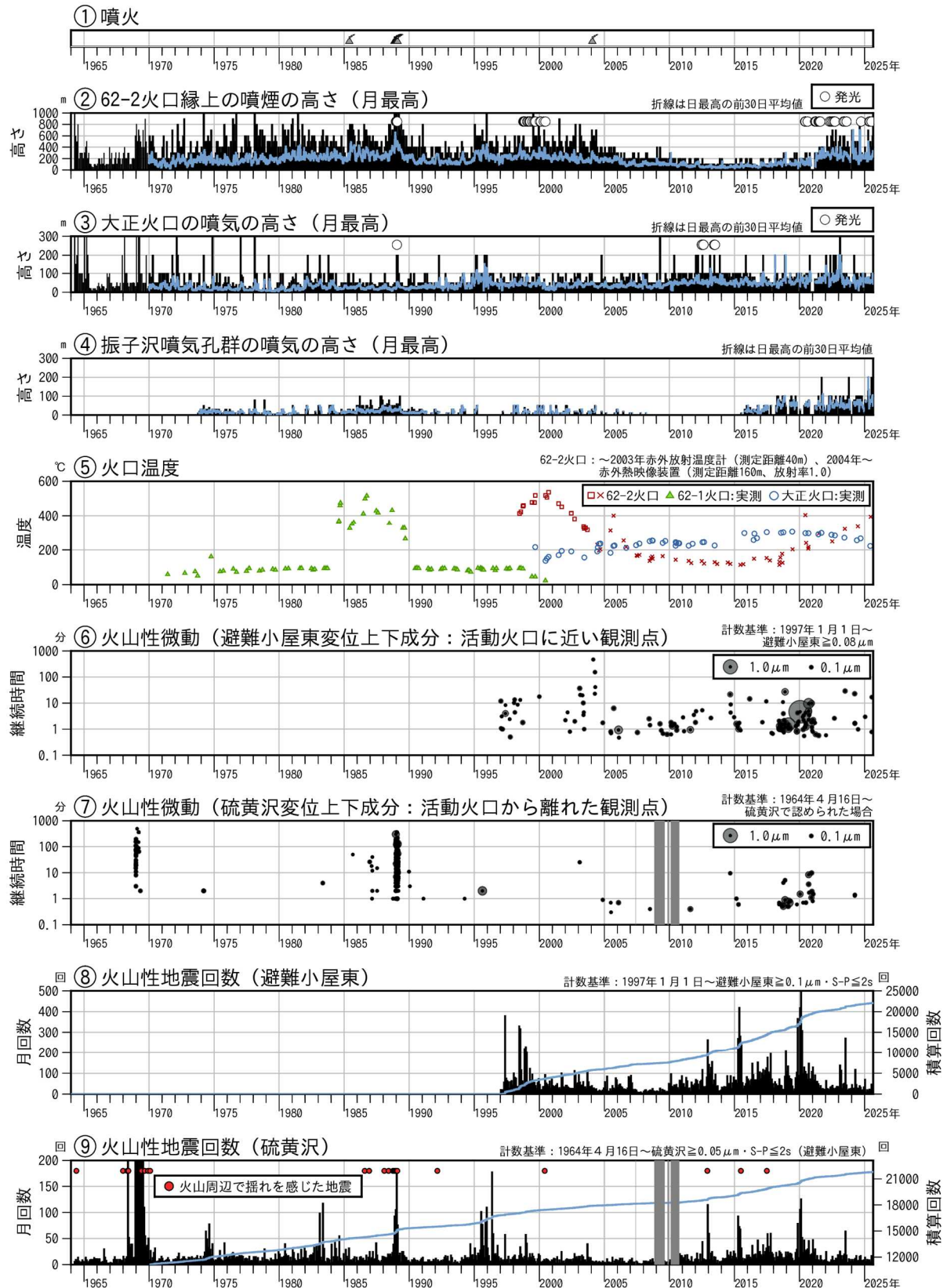


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2025年8月）

⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び産業技術総合研究所のデータを含みます。

⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

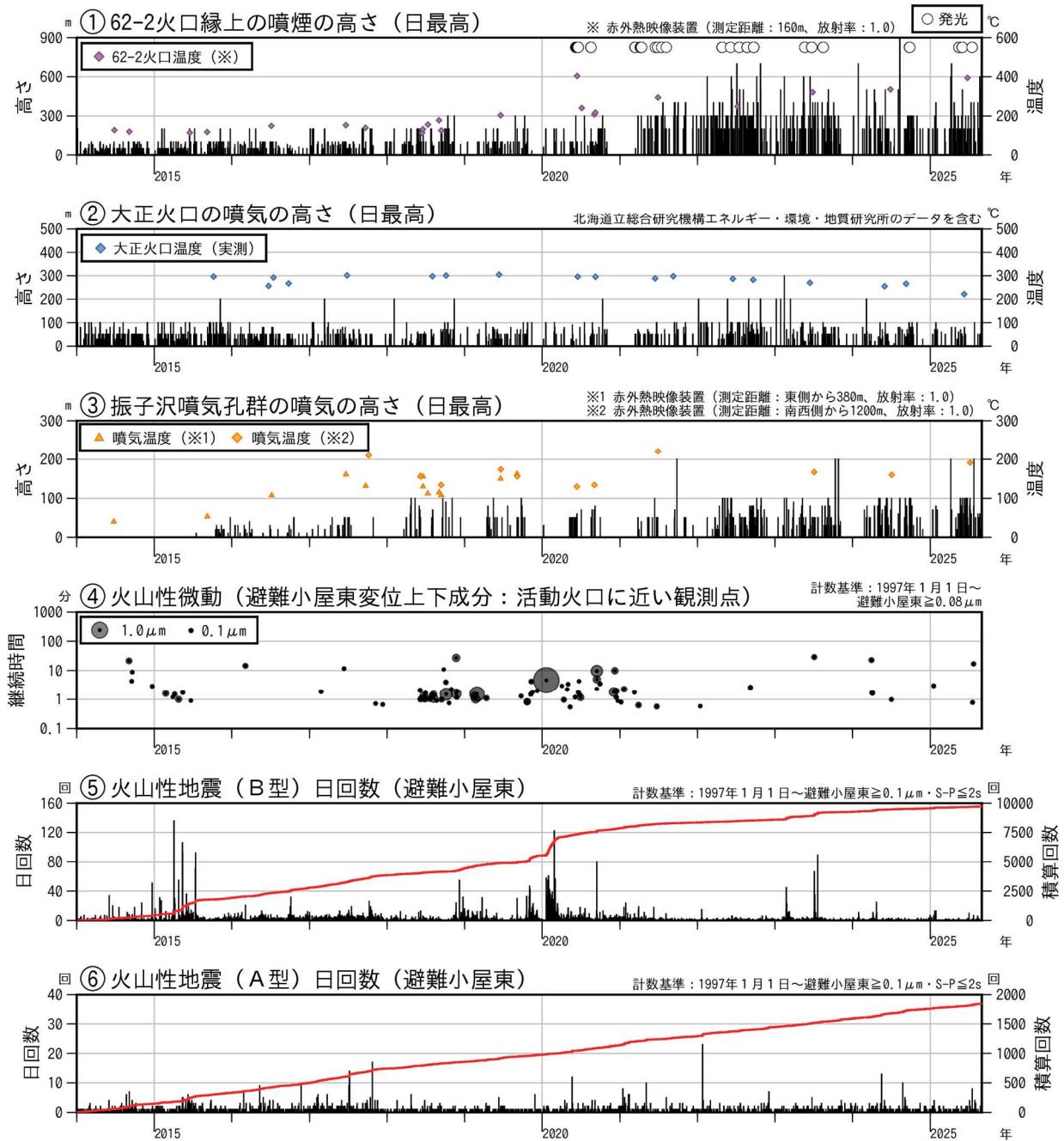


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2025年8月）

⑤は主に62-2火口付近のごく浅い所（図10参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、⑥は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

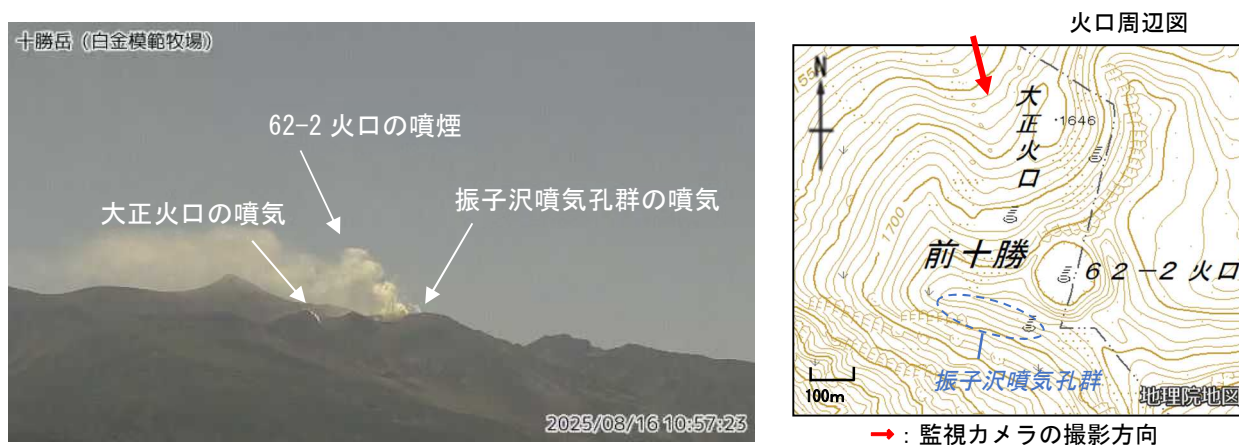


図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

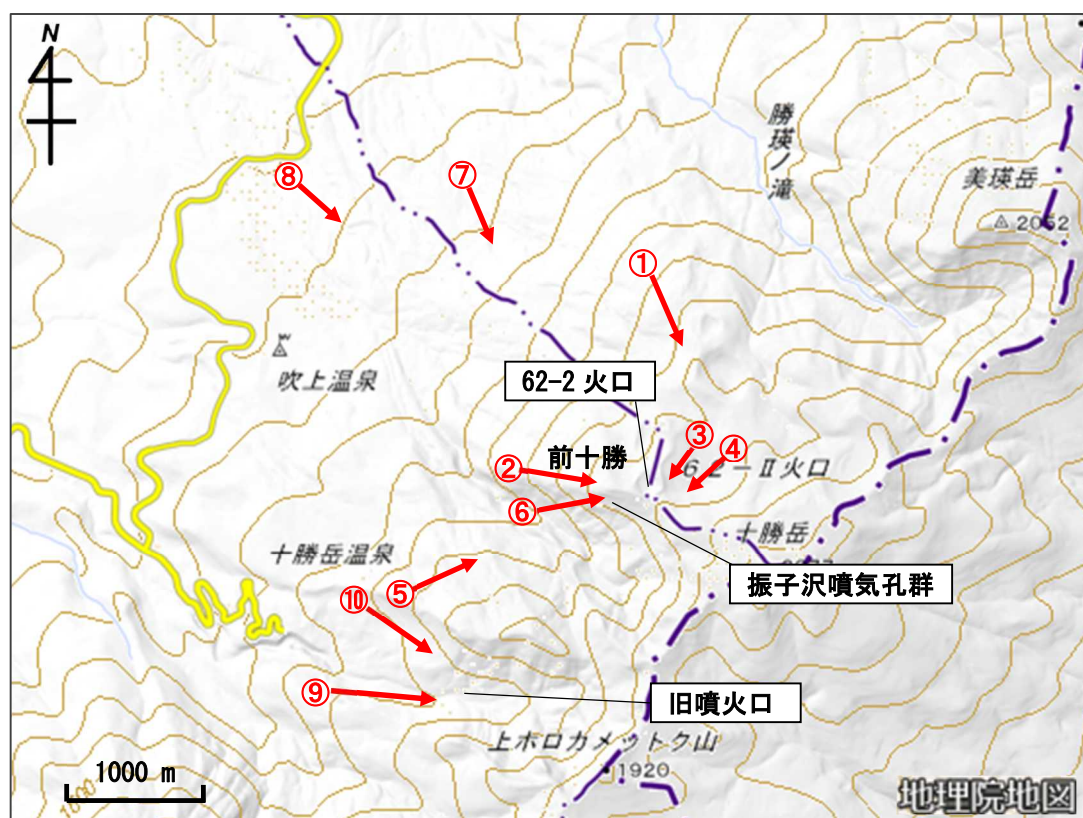


図4 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図5 十勝岳 火口周辺の状況

左：北西側上空（図4の①）から撮影

右：西側上空（図4の②）から撮影

・噴気の状態に特段の変化は認められませんでした。

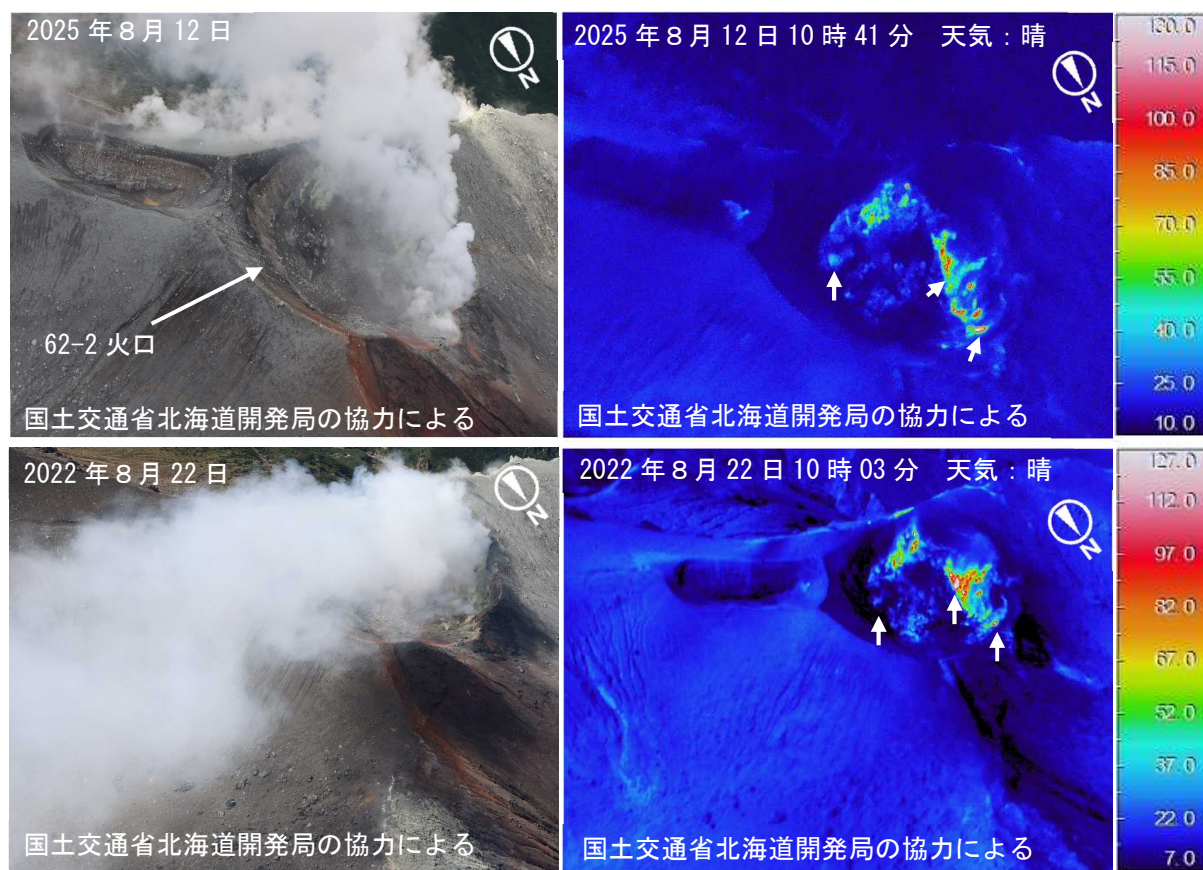


図6 十勝岳 赤外熱映像装置による62-2、62-3火口、新丘の地表面温度分布

上：北東側上空（図4の③）から撮影

下：北東側上空（図4の④）から撮影

図中の白矢印は同じ場所を示す。

・2022年8月22日の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

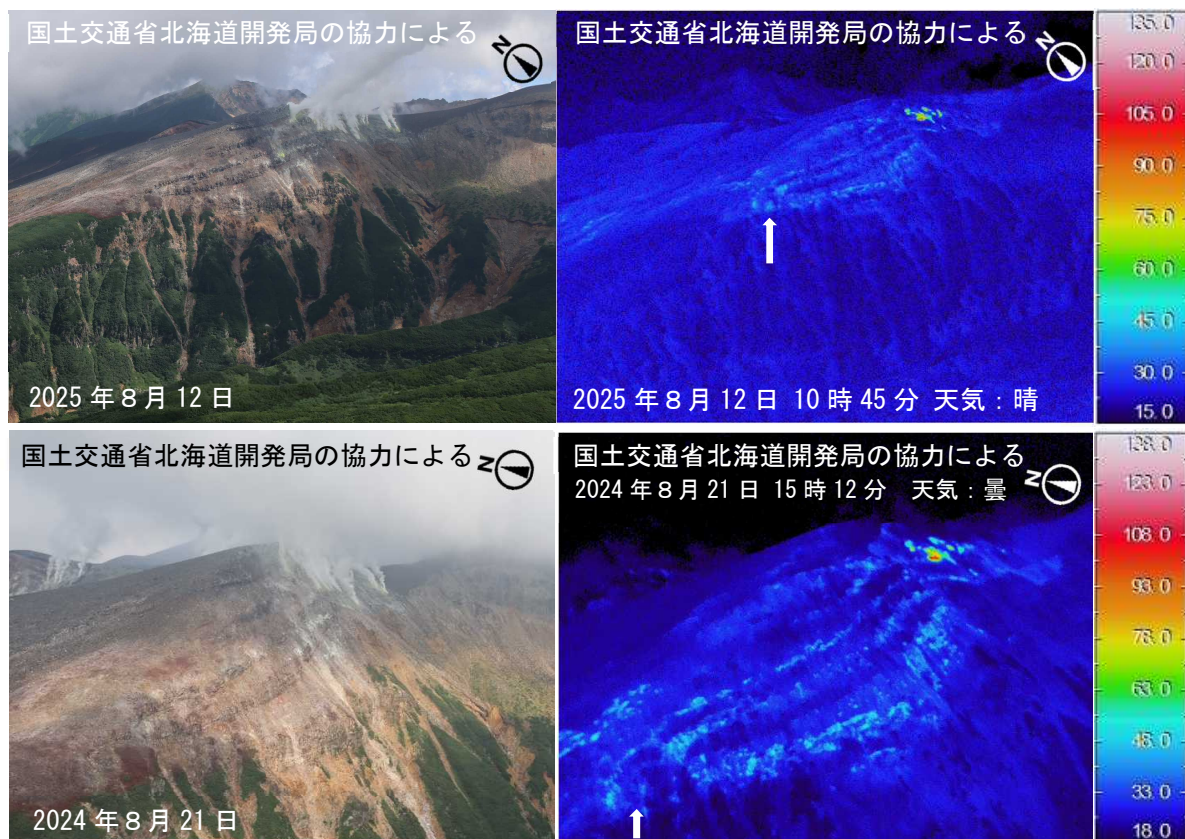


図7 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布
 上：南西側上空（図4の⑤）から撮影 下：西側上空（図4の⑥）から撮影
 図中の白矢印は同じ場所を示す。
 ・2024年8月21日の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

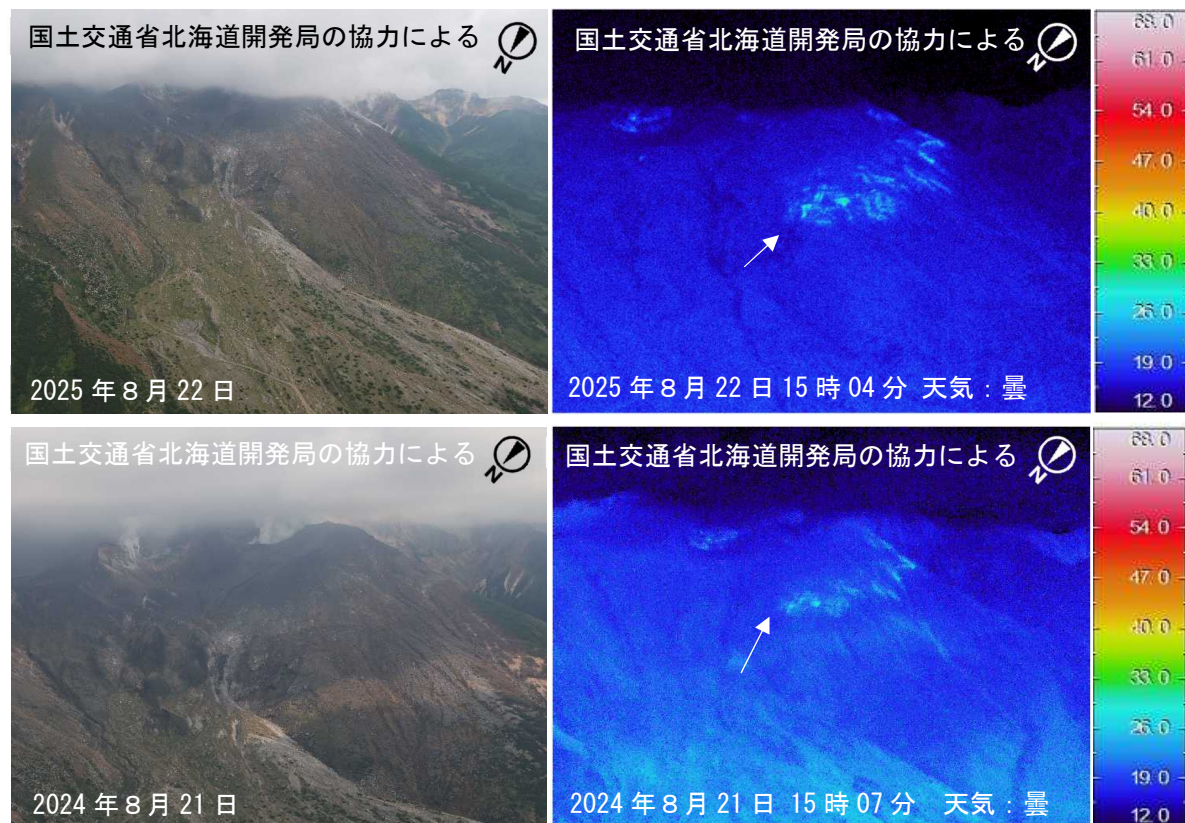


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による前十勝北西側斜面の地表面温度分布
 上：北西側上空（図4の⑦）から撮影 下：北西側上空（図4の⑧）から撮影
 図中の白矢印は同じ場所を示す。
 ・2024年8月21日の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

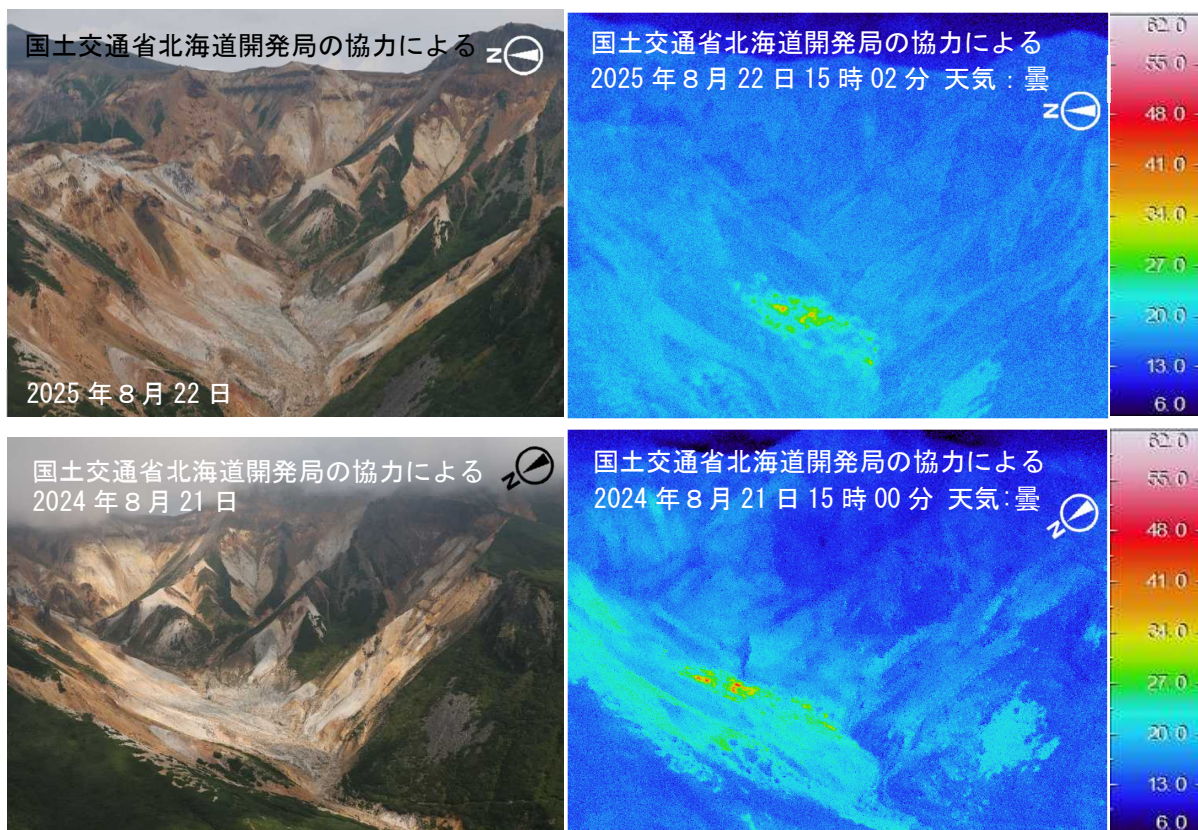


図9 十勝岳 赤外熱映像装置による旧噴火口の地表面温度分布
 上：西側上空（図4の⑨）から撮影
 下：北西側上空（図4の⑩）から撮影
 ・2024年8月21日の観測と比べて、特段の変化は認められませんでした。

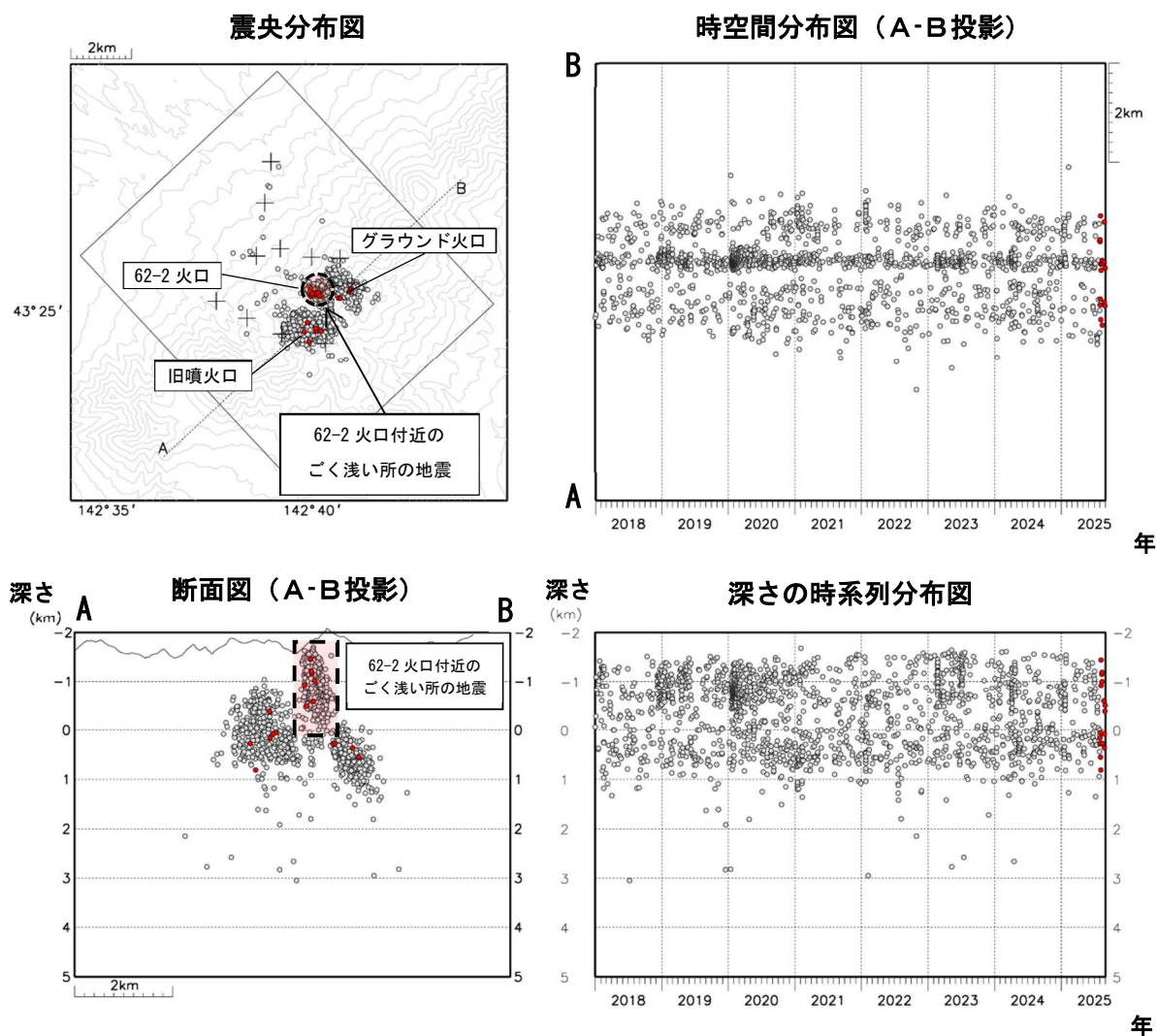


図10 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2025年8月）

●：2018年1月～2025年7月の震源 ●：2025年8月の震源 +：地震観測点

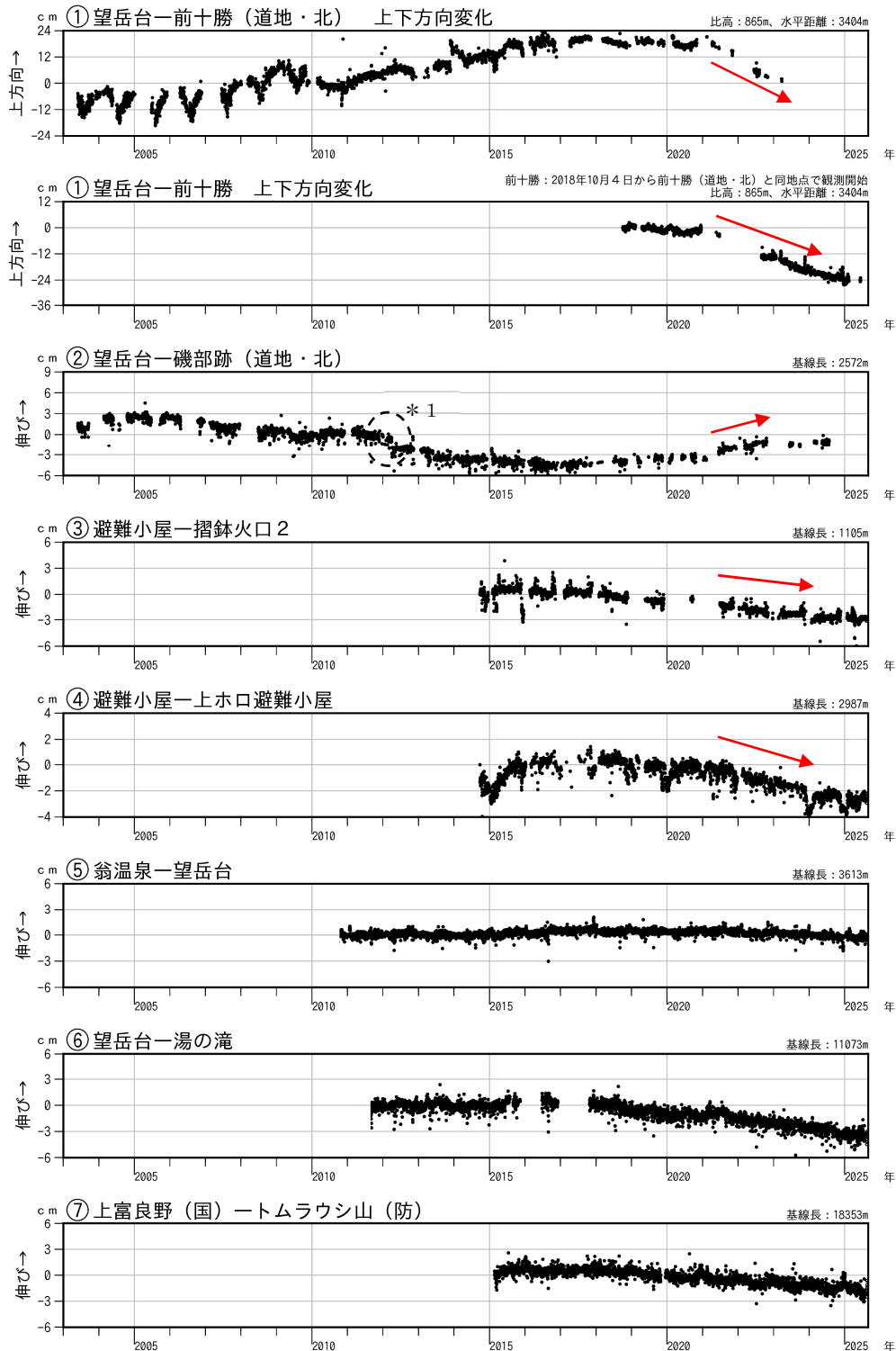


図11 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2025年8月）

グラフ①～⑦は観測点配置図（図12）の基線①～⑦に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（**赤矢印**）が観測されていますが、2022年頃からやや鈍化しています。62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線③④は、2024年秋以降、概ね停滞しています。
- ・ 基線⑥⑦では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いています。

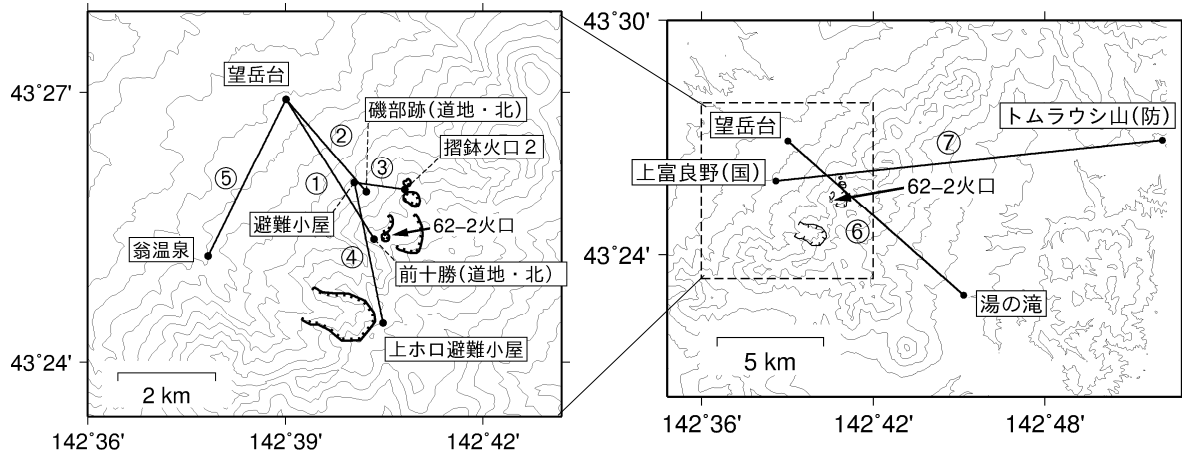


図12 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線①～⑦は図11のグラフ①～⑦に対応しています。

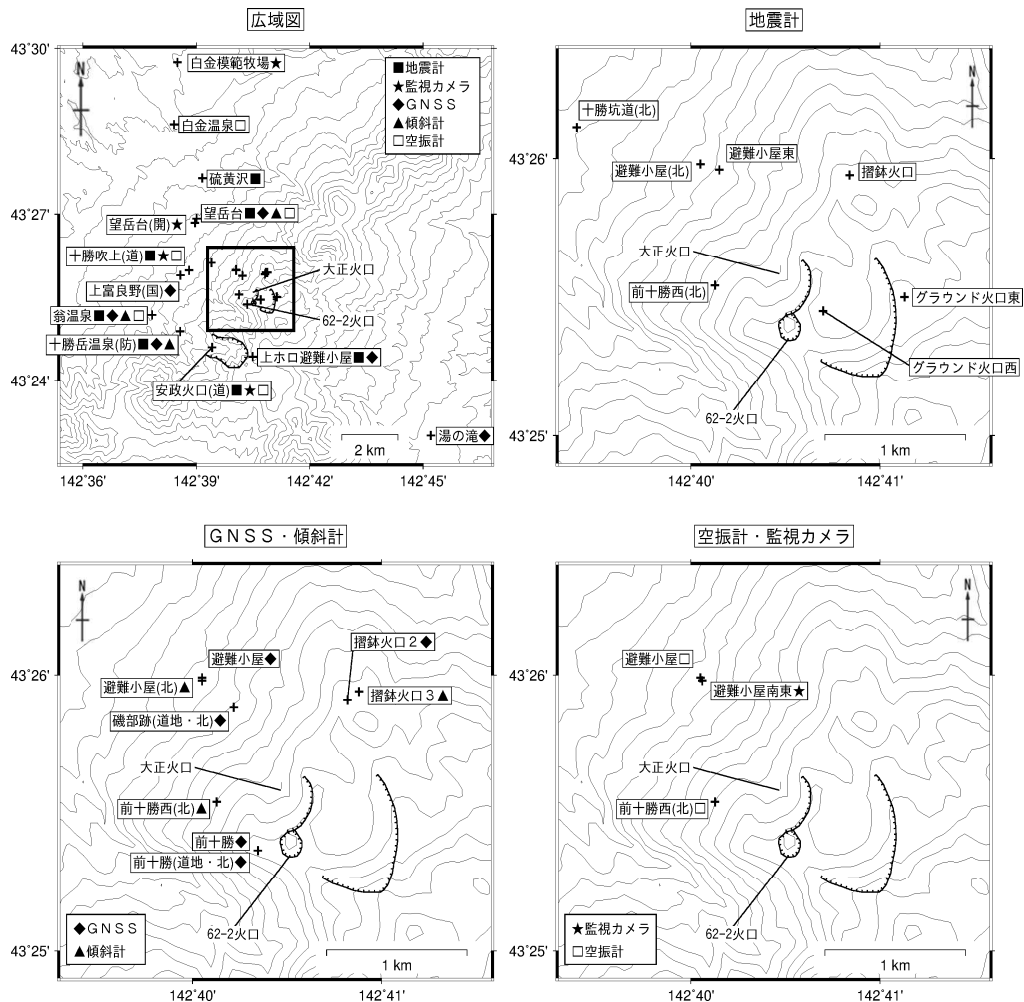


図13 十勝岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で示した領域を拡大したものです。

+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(開) : 国土交通省北海道開発局

(国) : 国土地理院

(北) : 北海道大学

(防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所

(道) : 北海道

(道地) : 北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所